Japanese Association of Russian Scholars

交差する。同連10～14行「若き詩人は早ぎし最期をみつけり！／嵐ふきていみじき花の／暁にしおれり／祭壇の灯消ゆ…」には『エヴゲーニイ・オネーギン』が書かれた時代の叙情詩の決まり文句が凝縮されており，レンスキー的文体を真似ることによってレンスキーの死を嘲笑しているように響く。

以上のような分析等から『エヴゲーニイ・オネーギン』における“作者”のレンスキーに対する態度は一貫して嘲笑的であり，嘲笑のさいに一度持ち上げてから落とすという手法が何度も用いられていると言える。嘲笑の理由は第1章57～59連に求めることができる。“作者”もレンスキーも詩人だが，恋が終わらなければその対象について書くことのできない“作者”にとって，レンスキーは別のタイプの，しかもまだ未熟な詩人なのだ。自分の愛する心を詩のなかで巧みに歌うことができないレンスキーに対して，“作者”は不満を感じていたのであり，それが嘲笑となって現われたのではないだろうか。

手紙の暴力——ドストエフスキーの初期作品における書くこと／読むこと

番　場　　俊

かつてシクロフスキーは『貧しき人々』(1846) について「この物語は書物的だ」と述べたことがある。だが，そう言っただけではまだ足りない。ここにおいて舞台にかけられているのは，書くこと／読むことの様々な実践なのであり，更には書物，文字，声，幻影の複雑な絡み合いなのである。ドストエフスキーの処女作が書簡体小説であったということはゆえなきことではない。ジェーヴシキンの冒険が，浄書する＝書き写す行為から創作する行為へと跳躍せんとする冒険，〈作者〉になることの冒険であるならば，それは文字＝手紙 (letters) と文学 (literature) との間の僅かな裂け目を彷徨する他はない。

ここで書物あるいは文字＝手紙の地位は両義的である。文字の物質性，あるいは書物の文字通りの反復は，まず第一に抑圧されるべきものとしてあらわれる。文字は幻影に，そして声に従属させられる。ペテルブルクの夢想家のまなざしと同様に，ジェーヴシキンのまなざしは文字を突き抜けてイメージに至り，イメージは〈内面〉の物語を語りだす。「近代の読者」(ニーチェ) に特有なこの過程を，バフチンの読解もまた忠実に反復している。だが，他方，幻影と声を可能にするものもまさしく書物の網の目なのである。文字を抑圧するのは，逆説的にも「図書館の幻想」(フーコー) なのだ。

ヴァーレニカの手紙のうちに，またいくつかの文学作品のうちにおのれの鏡像を再認し，〈作者であること〉の幻想を確立しようとするジェーヴシキンの冒険は，糸を巻きつけられた手紙，突然顕わになった手紙＝文字の物質性の脅威のうちに挫折する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

しかし，ここで手紙は他ならぬ読者に宛てられたものとなる。『貧しき人々』という手紙の宛て先となったベリンスキーらの性急な熱狂は，言語の物質性を抑圧する主人公の行為を反復し，作品の内部／外部の境界を攪乱してしまう愛の行為でもあったのである。

Φ. ソログープ『小悪魔』解題の試み

竹　田　　円

近年 Thurston, Rosenthal & Foley によって，ソログープの『小悪魔』がエウリピデスの『バッコスの信女』を下敷きにしていることが明らかにされ，その綿密な検証が行われた。そして，『バッコスの信女』のディオニュソスをサーシャに，ディオニュソスに対立する王ペンテウスにペレドーノフをあてはめた，サーシャ対ペレドーノフという対立の構図が浮かび上がってきた。発表以来，サーシャとリュドミラをめぐるプロットは，作品全体の構成を不完全にするものと批判的に考えられてきたのだが，ペレドーノフのプロットに対立する物語の軸をなすものとして新たにとらえ直されたのである。しかし，ディオニュソスにサーシャを，ペンテウスにペレドーノフを図式的にあてはめるだけでは矛盾も多い。サーシャは『バッコスの信女』のディオニュソスになぞらえるにはあまりにも脆弱で，ソログープの他の作品に登場する俗世の中で破滅するひ弱な少年のイメージが強い。ペレドーノフもペンテウスのように八つ裂きにされて滅びることはない。むしろペレドーノフに対峙するものとしてリュドミラに着目すると，二つのプロットがどのように対立し，ソログープの世界観をどのように反映しているかが明確になるのである。

第一に，物語の背景となる「季節」の設定の違いに注目する。ペレドーノフのプロットは冒頭と末尾に繰り返し現れる庭，すなわち現実世界の描写によって，秋に始まり冬に終わることが明示される。それに対してリュドミラの世界は，彼女の「暑い夏の夢」「花々の咲き誇る部屋」の描写から，夏に設定されていることが分かる。秋から冬へと向かう季節は衰微していく生，死を，それに対して夏は生の盛りを象徴する。またリュドミラの夢に登場する「蛇」「白鳥」「裸の少年」といったギリシャ神話的要素や「私は古代のアテネに生まれるべきであった」という告白は，リュドミラの世界が，夏に設定されていることと併せて古代ギリシャ世界を志向するものであることを暗示し，現実の世界や価値観のみに固執するペレドーノフの世界と対立させる。第二にソログープの重んじていた「肉体」の描かれ方であるが，（ソログープは『カンバスと肉体』という論文で，人間の肉体と自然の調和を重んじている古代を賛美し，それに対して現代人を批判している，等々。）ペレドーノフの描写では，コート，

NII-Electronic Library Service